

2019 年 A セメスター留学報告書

今井求紀

1 はじめに

北京大学元培学院で一年間留学を終えた今、日本からこの一年を振り返るのは少しおっくうな気もする。去年の春学期から夏を超え秋学期まで様々なことを経験した二学期間、一方で留學生活の成果として、また一方では純粋に人生の段階として一回りか二回りほど成長したとを感じる。どこまでが留学の収穫なのか、どこまでが21歳の一年が与えたものなのかなど決めるのもどこことなくしっくりこない。たとえ同じ世代の学生が留学をしたとして、それはまた全く違った色のものになるのだろうと思うと、どのようなことを報告すれば読み手の役に立つ報告書になるのか、想像がつかない。一般的な留学生と異なり中国北京大学で留学すべき明確な理由があるわけでない自分の経験がどの程度他の人の参考になるのかはわからないが、こういう留学もあるのかと思っていただければ幸いである。



写真1 中国伝統芸能影絵芝居“皮影戏”

2 留学の概要

2.1 授業

キャンパスアジア留学プログラムでは現地提携先の北京大学元培学院への交換となり、元培学院の学生と同じ授業を受けることができる。元培学院は北京大学の中で優秀な生徒が所属し、複数学部の授業を組み合わせてとることができる特殊な学部である。現地元培学院の学生は専門を定め、それを軸に要求単位が定められ、授業選択にある程度の制約がともなうが、交換留学生である我々は自らの大学への単位変換を考えなければ、かなり自由に授業を選択することができる。逆に大学単位の交換留学生が主にとる留学生向けの授業をとる

ことは難しく、中国共通語の授業などは充実しているとはいえないが、聴講で出席することは可能であり、また中国国内の方言などを勉強したい場合は、少し大変にはなるが授業選択も可能なようである。授業は英語（もしくは中国語との二か国語）で開講されているものも、中国語で開講されているものもあり、特に国際関係などの授業は英語での授業も豊富なようである。ちなみに英語自体の授業はとれないものがほとんどである。

東京大学での専攻が教養学部表象文化論コースである僕は、関心のあ
る授業はほとんど英語での開講がなく、前期に引き続き今学期もすべて中国語
で開講されている授業をとった。前期はコミュニケーションスタディズの領域
の授業をとったが、今期はついに自ら最も興味関心のある芸術分野のカリキュ
ラムを組んだ。その中でも元培学院の新入生向けに開かれている“新入生討論ク
ラス”に参加できた際にはキャンパスアジアで留学してよかったと感じた。“新
入生討論クラス”とは本来元培学院の学生のみに特別に開かれている、担当教員
が設定したテーマについての討論を中心とした少人数クラスである。僕が選択
した授業は西洋映画における人型怪物の表象を討論する授業であり、自らの関
心に合致しているところがあり、大きな学びになった。また、討論クラスなので
参加が求められ少しハードルが高かったが、一つの挑戦として価値があった。後
期に進学するにあたり思い切って表象文化論コースに進み、特に視覚芸術にお

ける表象などを取り扱いたいとざっくりと考えていた僕ではあったが、芸術方面に関して専門的な勉強は全くしたことがなかったので、中国にいる間に少しでも勉強ができたことはとてもよかった。特に留学に来る前後から興味を抱いていた映画研究に関して粗末ながら勉強できたのは有意義であったし、芸術分野では（西洋―）東洋という軸が顕著に重要になってくる分、中国において芸術の授業を受けたことは大きな刺激になった。

中国北京大学での授業は一コマ 2 限分か 3 限分(1 限は 50 分間)使い、一クラス大まかに 30 人から 100 人程度の規模かそれより大きい大人数講義形式ほとんどである。授業選択の傾向のためかわからないが、一クラス計 3 から 4 個要求される課題のうち一つにグループ課題があることが多く、同じクラスをとる生徒と全く知り合うチャンスがないわけではない。グループ課題のみでものすごく仲良くなるということもないのではあるが、やはり現地生徒と知り合う機会が少しでもあるというのは助けになった。また、今学期とったものの中にはオンライン講義を導入した授業もあり、日本では経験したことのない形式の授業を体験できたのも貴重な経験になった。



写真2 最寄りの食堂

2.2 生活

中国において大学はほとんど寮をキャンパス内にもち、学生は多くキャンパス内の寮から通う。キャンパス内には数棟の食堂やカフェ、コンビニエンスストア、浴場（寮内のシャワー室とは別）や床屋、郵便局に宅配業者など各種生活必需サービスが充実しており、生活はその気になればキャンパスから一歩も足を出すことなく完結することができる。教室までもドア to ドアで5から10分で着くので、通学などというものはないに等しい。先学期は中国政府からの奨学金の一部として提供されていた、メインキャンパスから道を挟んで反対にある留学生寮にすんでいたが、今学期は中国政府からの奨学金を受けることができず、キャンパス内の元培学院の寮に移動した。この寮は元培学院が元培学院の生徒のためにもつ寮で、元培学院の生徒はほとんど全員この寮に住んでいる。先学期の寮が2人部屋だったのに対し、今学期の寮は現地学生とルームメイトの

4人部屋であり、しかも大きさは先学期の寮の方が1.5倍ほど大きかった。寮費もかかるうえ寮の条件も先学期の寮と比べるとよくはないものの、現地学生と同じ寮に住めるというのはメリットであった。今学期は運悪く工事中であったが、地下には自習室とその他リラックス用の施設が備えられており、ジムや映画室、音楽室、卓球室などが自由に使える。地下施設の利用は本当に楽しみにしていたので、工事中であったことは本当に残念だった。

食事に関しては食堂が非常に充実しており、しかも価格がとてつもなく安いのでかなり助けになった。元培学院の寮は食堂に囲まれており、すぐ隣の距離に3つ、歩いて2,3分の距離にさらに6つの食堂に一つのカフェ、一つのコンビニがあり、毎日食事の時間が楽しみであった。また、外卖と呼ばれるデリバリーサービス非常に発達している中国では、スマホで食事や飲料などを注文すれば30分ほどで寮の入り口まで配達員が商品を届けてくれる。多くの現地学生もこのサービスを愛用しており、留学生の中でもお世話



写真3 食堂の窓口

になっている人が多い。僕は経済的にそこまでの余裕はなかったのと、食堂自体もかなり充実していることから、うまくいろいろな食堂を回しそれぞれの食堂のおいしい料理を食べることで毎日の食事をまかない、どうしても外食したいときは友達をさそっていた。北京大学の南門、南西門の前には飲食店があり、また15から30分歩いた距離、自電車で5から10分ほどの距離にある中关村か五道口にも多くの飲食店やショッピングモール、大きなスーパーマーケットがあり多くこうしたキャンパス周辺で食事を済ませていた。レストランはほとんどが中華料理屋で、日本料理、韓国料理も多くあるものの、海外の料理、特に非東アジアの料理はファストフードを除いてあまり充実しているとはいえず、食の国際性という意味では北京もまだまだ進んでいないなという印象である。ただそれも裏を返すと“中華料理”の中にはそれだけ多様で豊富な内容が含まれているということでもあり、毎日同じ“中華”を食べているにしてはそれほど食べつかれるということもなかった。さすがに一年もいれば日本食や洋食などが恋しくなりはしたが。

中国というと大気汚染を心配する人も多いと思うが、現在の北京に関していえば大気汚染はだいぶ改善されており、もはやそれほどに心配する必要もなくなっている。確かに大気汚染がひどく数十メートル先が見えないような日もないことはないが、現地学生に言わせれば数年前と比べればもはや大気

汚染がなくなったといっても過言ではないというほどに改善されているという。

気になったのは夜空が赤く光っている日がよくあることで、中国の検索エンジンで調べたところ曇りの日には（どこでも）そうなるのだというような説明がほとんどであった。東京でそのような夜空を見た記憶もないし、帰ってきてからもそんな夜空を見てはいない。それが例えば緯度のせいなのかそれとも大気汚染のせいなのか、はたまたどんな原因によるのかはわからないがいずれにせよ少なからず体感では、目視でき特に冬には顕著な大気汚染も生活がままならないレベルではないというところである。ただ、息がしづらいなどと訴える留学生もいるのでやはりある程度の対策を現地で取ってもいいのかもしれない。



写真 4 大気汚染のひどい一日



写真 5 大気汚染ではなく、柳の種



写真6 少林寺の少年たち

3 留学を振り返って

先述の通り今学期は北京大学での留学の 2 学期目にあたり、夏は中国国内を一人で旅行して巡った。いざ一人旅をしてみて気づいたのは、人生の中で実は本当の意味で一人きりの生活を長期間するのは実は初めてであったということだ。日本にいれば家族がいて友達がいて、過去の留学先でもホストファミリーやルームメイト、友達がおり、バックグラウンドなしに人にみられる経験がそれまでになかったことに気づいた。一人きりになることをあまり好まない性格もあり、一人旅は孤独でさみしいものだと思っていたが、そんな予感とは裏腹にそれだからといって楽しくもさみしくもない孤独が新鮮で少し心地よかった。そこで発見したのはみられていない、みせていない自分であり、また、いままで

素であると認識していた自分が実は自分の認識以上に他人を意識した状態であったことに気づいた。こうした気づきは自意識や人間関係に対する態度を大きく変え、後半学期に影響を与えた。それまでに比べ自らの時間や考えを尊重できるようになったし、他人に対してもいい意味で心の距離をとれるようになった。

秋学期には授業を中心に自らの勉強をする時間を多くとり、専門にしようと考えていた映画もたくさん見ることにした。生活のリズムももっとゆっくりと過ごすように心がけ、忙しいリズムにのまれず自分のペースを保てるように自らを鍛えた。東京で育った僕はそれまで都会の喧騒とか都会の走るようなリズムを感じたことがなかったが、いざゆっくりと生活してみると、東京での生活が途方もなく忙しく、せわしないものであったかを実感した。ゆっくりと勉強を、生活をしていると、東京のせかせかとした生活にのまれ気づけば学習も投げやりに、生活も惰性で流されていただけだと思うようになった。そして真面目過ぎて周りどころか流されている自分すら見えていなかった自分が滑稽に思えてきた。東大に入学した後に学んできたことも多くなおざりにやっていたことにやっと気づき、もちろんその二年間で学んだことに価値はあるだろうが、もっと主体的に取り組めばさらに深いところまで潜り込めただろうと反省した。生活から学業、さらに人間関係まで自分のリズムで何事もできていなかったことに改めて気がつき、自らを軸にしてそれらを立て直す必要を感じた。

学業面でも後期課程が始まるこの段階で留学に来たのはかなり大きな効果があったように思う。後期の進学の際に学問的バックグラウンドの全くない表象文化論コースに思い切って進学することにしたが、今振り返るとコースでの授業はまだまだ理解が浅かったといわざるを得ない。中国で勉強していると、当時東大でわけのわからないことを言っていた教授が何を言っていたのかが分かるような気がしてくるし、明らかに授業に対する態度が作業的になっていたことが恥ずかしい。自分の努力不足を棚に上げ、教授と授業に責任を押し付け、こなしていた学期、さらには二年間に向き合うことができた。

また、中国で勉強したからこそその成果も大きかった。中国に来た留学生の多くがそれほど共産党の圧力を感じないなどといったりするが、僕の感想はその反対である。受けている授業の問題なのかもしれないが、先学期に授業ごとに録音をしていいか教授に尋ねたときの教授の慎重な対応をはじめとし、ことあることに自分が唯物論者であることを強調し、また中国の優秀さを強調する言動には驚かされるものがある。それがどこまで共産党の圧力として理解すべきなのかはさておき、どことなく醸し出される“答えのある世界”のにおいが少し鼻についた。一方で中国の“文明”への発展が盛んに議論され、おそらく多くの日本人が中国に感じている程度をはるかに上回った発展途上国意識があり、他方で伝統的な中国文明への“文化的自信”は西洋文明への批判を当然かつ重大な

使命であるかのように行い、西洋がまちがっていることが東洋＝中華が正しいことであることの証明であるとでも言わんばかりである。もちろんそういった教授のみでなく、しっかりと批判的な態度をもち中国、東洋を客観的にとらえようとする教授もいる。この問題は純粋に「中国」がどのような国であるかという問題だけでなく、その内部に存在する世代間の違い、地域間の違い、特に都市と地方の間の違いなども背景には存在するように推察され、日中の留学生との交流を通じてこの問題についてさらに深く考えていきたいと思うし、それを日本社会やほかの社会に対する見方にも反映させていきたいと思う。

4 おわりに

中国での一年間は一方で距離的に、物理的に日本での生活から僕を引き離すことで、他方で時間的な余裕を作り出すことで、自らの人生の舵を握りなおすきっかけと機会を僕に与えてくれた。もしかしたら一年間日本を使わなかったことも助けになったかもしれない。いずれにしても東京に帰ってきた僕は明らかに行くまえと全く違った生活と人間関係を築いているし、この変化には非常に満足している。

そしてその一方で中国に身を置いたということが新しい生活の在り方を可能にし、新しい自分の構築の基礎を準備してくれた。中国は日本にとってやはり特別な存在であり、それは文化的な源流であるという意味だけでなく、歴史

の中で一つの鏡のような形で実際には存在しなかった「日本」の形を想像させてくれる。また、日本と中国の文化的な非対称的關係や中国が日本に対して抱く文化的意識を感じ、考えたことが自らの中での日本の文化的イメージを再構築することにもつながった。

そして中国で感じ取った問題意識は残り二年、大学の後半を生きるうえでかけがえのない財産となった。もともと一つの切り離すことのできないアイデンティティの基盤として東アジアを考えたいと思っていたが、一年の生活はむしろ東アジアの中のダイバーシティに目を導いてくれた。多様な世界としての東アジアを考えることは決して東アジアを切り分けていく作業ではなく、むしろ東アジアの有機的なつながりを再認識する作業であると今は思う。そしてその中で日本を考えることが、日本を東アジアの中に、そしてその先の世界の中に位置づけるための基礎なのだと今は思います。